目次

凡例……六
解題……一〇
一　序……一
二　世の不思議（行く河の流れは絶えずして）
イ　小序（予、ものの心を知れりしより）……一七
ロ　安元の大火（去んじ安元三年四月廿八日）……一九
ハ　治承の辻風（又、治承四年卯月のころ）……三〇
ニ　都遷り（又、治承四年水無月の比）……三七
ホ　養和の飢渇（又、養和のころとか）……六一
ヘ　元暦の地震（又、同じ頃かとよ）……八六
三　ありにくき世……九八
四　隠棲（すべて世の中のありにくく）……一一〇
五　方丈の庵（わが身、父方の祖母の家を伝へて）
イ　末葉の宿り（ここに、六十の露消え方に）……一一八
ロ　庵の有様（その家の有様）……一二〇
ハ　庵中の生活（若し、念仏物うく）……一三六
六　閑居の気味（おほかた、この所に住み始めし時は）……一五四
七　傾く月影（抑、一期の月影かたぶきて）……一七七
八　跋（時に、建暦の二歳）……一八五
池亭記……一八七
索引……二〇七

通解方丈記　塚本　哲三
詳註方丈記・発心集　次田　潤
方丈記　山田　孝雄
解釈と評論　方丈記　松浦　貞俊
方丈記（新注国文学叢書）　川瀬　一馬
方丈記の新解釈　浅尾芳之助
評註方丈記全釈　新間　進一
方丈記解釈法　武田　孝
方丈記評解　富倉徳次郎
方丈記・徒然草（日本古典文学大系）　西尾　実

前掲の中、山田氏の著書以下、浅尾氏のものを除いては、大福光寺本によっている。

なお、研究書には、山田孝雄氏の『大福光寺本方丈記解題』、川瀬一馬氏の「国宝大福光寺本方丈記は鴨長明自筆なり」（『日本書誌学之研究』所収）、簗瀬一雄氏の『鴨長明の新研究』、永積安明氏の「方丈記序論」（『中世文学論』所収）、西尾実氏の「作品としての方丈記研究」（『日本文芸史における中世的なるもの』所収）、校異・訓み・評釈の諸説を批判した田中裕氏の「方丈記の正しい解釈のために」（『解釈と鑑賞』三四年三月号）、長明の作品全部を収めたものに、簗瀬氏の『鴨長明全集』がある。

ちなみに、本書において、古注を引用した時は、首書・諷説・盤斎抄・諺解・流水抄の書名の略称に従い、新注の場合は著者名を挙げた。

一　序

行く河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しく止まりたる例なし。世の中にある人と栖と、又かくのごとし。

校注　(1)ト、マリタルタメシナシ―と、まる事なし（前）と、まる事なし（嵯）　(2)又―「又」ナシ（前）

通釈　（水の流れ）行く川の流れは（いつも）絶えないで（流れているが）、しかも（それは前にそこを流れていた）もとの水ではない。（川の水が）すら〳〵流れずにたまっている所に浮かぶ水のあわは、一方で消え（たかと思うと）、一方ではできて、いつまでも（消えずに）じっとしているためしはない。（この）世の中に生きている人間と、（その）すまいも、（変わりやすいという点では）またこの（川とあわ）とに同じようである。

語釈　**行く河の流れは**―流れ行く河の水は、の意。「行く河」というのは、単に「河」というのとほぼ同じであるが、「行く」という修飾語がついているだけ、河川の流動性が表現され、また古来の名歌・名句も連想されて、情